

友野和子

市議会だより No. 3 2020.7.14



今年は市政 50 周年となる年ですが、3月議会は新型コロナウイルス対策のため、一般質問は清瀬自民クラブでは代表のみで、予算の審議・各委員会等は早期短縮となりました。その後4月7日緊急事態宣言が出され、宣言中は事務局が議員からの市民等の情報を一本化して対応。5月25日に宣言は解除されました。6月の議会は、新しい生活様式の対策を取った上で開かれました。コロナウィルスの情報を集める中、いろいろな情報を知る機会となりました。あらためて誤った情報に惑わされないよう、多方面の情報を集めて何が必要か判断してゆく事。また、自分の出来る範囲での最善をつくす事が一人一人に求められている事をつくづく感じております。現場での対応や判断がいかに大切であり、小さな自治体（清瀬）での人と人との信頼関係から生まれる地方自治と民主主義の結びつきを具体的に模索する、今日この頃です。

私の一般質問

■ 3月議会では一般質問は出来なかった為、予算特別委員会時に市への要望を2点伝えました。■

- ① 再生ペットボトルの循環が実現すればプラスチックゴミをかなり減らせる。デポジット方式をとる自動販売機の設置を自治体で進める SDG（持続可能な開発目標）対策としてとれないか？
- ② 昨年清瀬市の奨学金制度を取りやめた件を鑑み、インターネットを使った募金で資金調達する自治体クラウドファンディングで、市の財政に負かからない医療・福祉関連の奨学金制度をつくれませんか？市内の施設の看護師・介護師の不足の状況を考えると奨学金を返す方法としては市内の施設で働く事で返せば相乗効果が生まれる。若い人達への奨学金という目的のある募金は清瀬のまちづくりの夢をかなえる一歩となると考えますが？

6月議会の一般質問より

■ 市政50周年の年で、議員になり1年経つので、「清瀬市50周年にむけて」の提言をまとめました。■

——— 中央公園から賑わいを（駅周辺の賑わいをとりもどすために） ———

- ① 中央公園を（Park-PFI で）広場として使える様に、Wi-Fi などが利用できる民間活用したカフェなどを導入し、新しい生活様式により求められる魅力ある空間とする。
- ② 中央図書館（在公園）を生涯学習の場として、文学・医学・教育などの市民のつながりで文化の情報の発信や国内外との交流の場とする。清瀬の財産である病院の歴史もこの場より発信してゆく。
- ③ 南口児童館（これから開設）の構想～立地条件は社会福祉事業大学・明治薬科大学・国立看護大学から丁度中心地にある。各大学生の協力を得て、中高生の自立と参画ができ居場所となる施設になるよう整備してゆく。

■ コミュニティバスの活用について ■

市役所を中心に8の字を描く循環ルート：団塊の世代の文化活動を支える、子育て世代を児童センターにつなげる、高齢者の病院・買い物の足となり運転事故を未然に防ぐ、清瀬市の魅力を PR するバス利用のニーズを引き出す。朝夕は駅にむけての通勤ルートが必要だが、昼間は上記のニーズに合わせて、空バスを走らせている民間バスと時間帯での住み分をすり合わせた走らせ方ができるのではないかと。（ルートについては昨年現行通りとしたばかりなので将来的な展望です。）

■ 介護の取り組みについて ■

清瀬自民クラブの研修で学んだ岡山の在宅介護総合特区の実践から、清瀬の現状を質問させていただきました。清瀬市の介護の取り組みは、認知症高齢者が安心安全に暮らせる場としてのグループホームが5か所整備され、都内自治体の中でも3位以内ぐらいの整備率で、認知症サポーター養成講座を小中学校で実施し、認知症カフェも実施。地域包括ケアシステムの構築が進み、医療と介護の関係が「顔の見える関係」から「腹の見える関係に」深化していることの回答を得ました。このことは清瀬市の魅力であると感じ、さらに魅力を広げるため、「清瀬市が行ってきている健康ポイントと介護ポイントを結び付ける。」という健康が運動だけでない心の健康に結びつく幅広いポイントの活用の可能性の話をもう少し進めたかったのですが、時間切れで、またの機会に取り上げたいと思います。

コロナウィルス対策について

清瀬市では3月上旬にすぐ9月までの行事の中止や当面の間の会館の貸し出しを停止し、介護関連の通所施設などは自宅待機の対策をとり、情報を収集・駆使し、徐々に感染防止対策を講じて解除をする対応を取ってきました。個々の対応も、金山公園など、市民の憩いの場を守りつつも、感染を予防する対策を進め、商店街の方々に対しては「エール飯」と街バルをつなげる施策を取りました。緊急医療の受け入れ先である昭和病院からは、院内感染を封じ込める徹底した対策を取り続ける緊張感は報告で伝わっており、この事態を乗り越えるためには、清瀬市での感染者を出さないようにすることだと思っております。清瀬には多くの医療・介護・福祉関連等の施設がありますが、従事者の方々の努力により院内感染は防がれてきております。子育て期の世帯は在宅勤務と子育てという難題を乗り越えてゆくための手助けがこれから自治体に求められてくると考えます。教育方面では、オンライン授業が海外に比べて遅れている事が明らかになり、清瀬市でも補正予算を使って進めてゆく事に繋がりました。(補正予算での清瀬市の対策については今後の市報にてご確認下さい。)

自民党女性局の研修に参加し、政府が手掛けたLINEのニュースにおける「新型コロナ最新状況まとめ」は国民一人一人の判断の基準となって機能し、全国各地の方々のLINEアンケートのご協力により、感染源のエビデンスを取る事が出来た話を聞きました。「ダイヤモンド・プリンセス号」の水際対策は、全国の医師会の協力と保健所の新システムの導入に繋がりクラウド化が進みました。海外に対してもウィルスの貴重なデータの蓄積となり、ワンチームで乗り越えてきました。

今政策として進めている厚生労働省公式の新型コロナウィルス接触アプリですが、個人情報保護されていて今後の感染拡大を防止し、全国一斉で無い細やかな対策をとるデータとなるので多くの方にご協力をいただければとの事です。第2・3波もワンチームで乗り越えていけたらと思います。



市長からの母への旭日小章の受勲は、市民の皆様と一緒に頂いたものと感謝しており、清瀬の市政に対する役割と重みを感じた一日となりました。